地方小出版 情報誌 アクセス

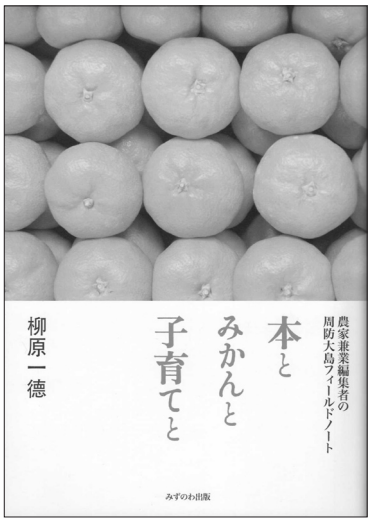
毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

第35回地方出版文化功労賞奨励賞を受賞した、島の些末な生活誌をめぐって

文／柳原一徳（みずのわ出版／みずのわ写真館／みずのわ農園代表）

昨年1月に刊行した拙著「本とみかんと子育てと ― 農家兼業編集者の周防大島フィールドノート」（A5判並製671頁）が、第37回農業ジャーナリスト賞特別賞に続き、第35回地方出版文化功労賞奨励賞を受賞した。写真250点、原稿用紙1600枚超、2017年9月から20年5月までの、998日にわたる島の生活誌である。元からの本業である写真の仕事で共著書を出してきたが、文字の本の著者になるのは21年ぶり。版元稼業は他人様の本を世に出すことが第一であり、自身の著作を出す余裕がなかったということでもあろう。



「本とみかんと子育てと―農家兼業編集者の周防大島フィールドノート」柳原一徳著／みずのわ出版発行／A5判並製671頁／本体価格：3000円／ISBN978-4-86426-046-6

宮本常一と鶴見良行の手法を実践する

地方出版文化功労賞の選考理由から引用する。

「いわゆる農作業日誌を超えて島の農業や日本の農業・食糧問題などへの考察も記録されている。さらに、かつてジャーナリスト、現在は出版を営み、その間の様々な経験や、神戸に育ち、幼少期の島の生活や東京などでの生活も体験した著者ならではの観察、感想や考察が、幅広いジャンルにわたってちりばめられている」「一方で、通して読むことの大変さや一般の読者に勧められるだろうかという意見、評価自体が難しいという審査員も一定数あった。それでも巻末の資料編を含めこの本が著されたことにより、なかなか残りにくい時代と場所の記録を切り取り、文章として後世に残すことの価値は審査員に共通して認識された」

前書後書と上っ面眺めて要点掴んで評するといった「要領の良い読書」を拒絶する単調且つ分厚い本を丁寧に読み込んでいる。ありがたい。だが「一般の読者に勧められるだろうか」という意見には首肯しかねる。広く多様な世間の一体どの層を指して「一般」というのか、私にはまるで理解できない。それ以前に、万人受けするものなど作って面白かろう筈がない。そんなものは東京の大手中堅版元に任せておけばよい。地方の零細版元が中央の真似をする必要などない。

編集者である私が、自著を自ら編集する。ルール違反である。セオリー通りなら、他人に編集してもらった方が良いものができるのかもしれないが、この本の編集は断じて他人には任せられなかった。仮に私以外の編集者がこの本の原稿を受け取ったとしよう。分量が多過ぎる、通読できない、減らせと、まず言われるに決まっている。イノシシにやられただの不作だの気候変動だの似通った内容の繰り返し、いちいち載せる意味がない、誰が読むんだこんなもの、読者のことを考えろ。そういう指摘を受けるに決まっている。

日本の、地方の、ムラの暮しは単調である。だが、抑揚のない日常の中にこそ狂気は潜む。民俗学者宮本常一（1907-81）の本を編み続ける中で実感したことの一つ。宮本の理念を語るのではなく、宮本の手法を実践してみようと考えた。あわせて、人類学者鶴見良行（1926-94）のフィールドノートを強く意識した。鶴見の手書き遺稿集「エビと魚と人間と　南スラウェシの海辺風景」（小社刊、森本孝編、2010年）とよく似たタイトルになった所以でもある。

未来が見えない中での過程の記録

営農指導の中でずっと言われてきたことだが、農業の基本は記帳にある。日々の天候や作業内容などの記録、経験、データの積み重ねが営農の継続を担保する。

「日々の農作業のなかで考えたことは書いて残しておかんと忘れてしまうよ」「現実問題として農業は儲けにならんけど、その尺度だけで価値づけてはいけない」。農民作家山下惣一（1936-2022）から戴いた言葉。それに触発されて日録をつけはじめた。

日々の天候、気温、作業内容にとどまらず、その作業の背景にあるもの、農業が先細る実情、過疎化、高齢化、島の生活文化、日々の暮しとその変化、子供と保育園小学校のことなどの記録と考察を続けた。単調な日々ながら、

書いて残すことは無限にあるようで、意外とネタは尽きないものである。

日録で集積したネタを厳密にセレクトし、煎じ詰め、一点突破で論考を書き起こした方が、いい本になると解ってはいる。だが、あくまで過程の記録にこだわった。すぐれたルポルタージュの大半は、結果が出たことに対して書かれたものである。この本に書かれていることは全て、結果の読み通せない中で、未来が見えない中で記録した、試行錯誤の「過程」である。

思えば、結果に至るまでの過程というものは、公式の記録には残らない。たとえば、私の住む周防大島にあっては、昭和30年代後半から40年代にかけて、水田からみかんへの大規模転作が進んだ。これが「選択と集中」を掲げた農業基本法の成立（昭和36年＝1961）を背景とするのは、西南日本のみかん主産地に共通している。そしてこれが後の生産過剰、大暴落、オレンジ輸入自由化、減反、低価格、高原価、高齢化、耕作放棄、地域荒廃へと繋がっていく。

さて、問題としたいのはその過程である。たとえば水田からみかんに転作するに際して、大島の農協や地域の中でどのような議論があったのか、先祖代々継いできた水田を潰すことに反対の声もあった筈だし、そうした当時守旧的とされた姿勢に対し口汚い罵りもあったであろうけど、議論の経過としての記録がまるで残っていない。結果としての大規模みかん転作、主産地形成、これだけである。

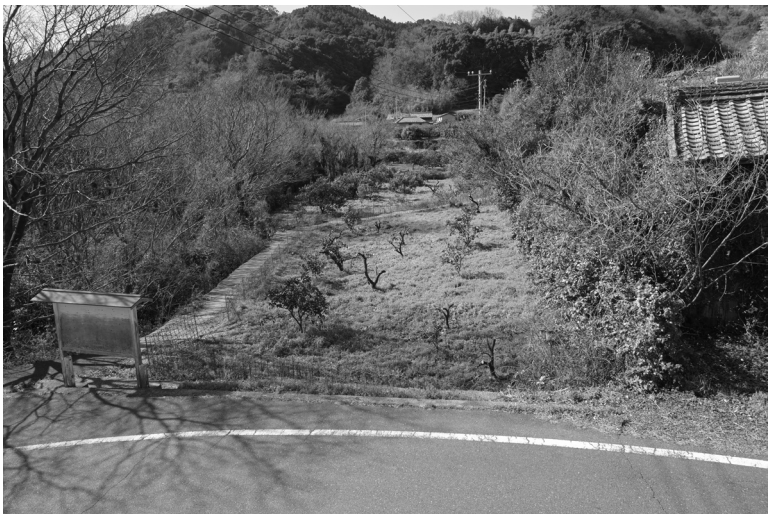
大島は戦後の作付転換でみかん主産地になったと見なされがちであるが、実は戦前すでにみかん産地として形成されていた。それがアジア太平洋戦争下、不要不急として食糧増産のため伐採されイモ畑に替る。また、大島の一部地域では明治30年代から昭和戦前期にかけて養蚕が基幹産業になっていた。その地域では一面が桑畑だったと聞く。昭和恐慌と戦時統制により桑は伐採され、芋畑に替る。こうした変化が大きな流れとしてはわかるのだが、その過程で何があったのかは記録されていないし、その時代に生きた人たちでもそんな些末なこと、いちいち記憶していないことが多い。

そういえば、みかんを選果場から市場へと出荷する際の容れ物は、昭和30年代は木箱だった。高度成長期にダンボール箱に替ったと聞くが、木箱からダンボール箱へと、ある年に一気に替ったのか、それとも併用した時期があるのか、わからない。少なくとも、昭和44年（1969）生れの私が子供の頃には既にダンボール箱になっていた。

昭和30年代、みかんを木箱に詰めて船で運んでいた。それがダンボール箱パレット積みトラック輸送に替った。高度成長期のことだが、正確な年次は確認できない。みかんの木箱は殆ど現存しない。みなさん風呂の焚き付けに使ってしまった。簇（まぶし）（蚕が繭を作るために入る格子状の木箱）も同様、煙と消えた。

こうして何も残らず忘れ去られていく。些末の些末たる所以であるが、些末の中にこそ未来が見えない中それでも歩む道を誤らないための大切な教訓

すべて青島温州。左がMサイズの良玉、わが農園の直売用。実が締まって味が濃厚、糖と酸のバランスがよい。中央はLサイズの農協向け一級出荷分。見た目はきれいだが、甲高で皮が浮きかけている。農協選果場のセンサーで計測する分には申し分のない仕上りとされるが、食味は左の玉より明らかに劣る。右は3Lの浮皮果。不味い。気候変動により全体の収量が低下するが、それにもまして良玉の数量が出なくなる。2021年12月
（「農民文学」No.329、2022年1月所収の拙稿「気候変動下、みかん農家の一年」より転載）



園地の上段（画面右手）は空家、下段（画面左手）は耕作放棄地で、いずれもザツボクが繁茂、日照を遮る（春先の写真ゆえ、落葉している）。この園地で2020年12月に収穫した温州みかんは日照不足等による品質劣化甚だしく、この収穫を最後にみかんを全伐採、カボスに改植した。写真は伐採直後に撮影。若木は他の園地に移植した。2021年3月
（「農民文学」No.329、2022年1月所収の拙稿「気候変動下、みかん農家の一年」より転載）

耕作放棄地を再生したみかん畑。大津4号6年生の収穫風景。2019年11月（撮影＝河田真智子）

イノシシの食害。心が折れる。2021年11月

みかんの選別作業。転がしたり落としたりすることで果実の呼吸が増えて味が落ちる。わが家では選別機を使わず、すべて手作業で選別する。2021年11月

青島温州。右が完着（完全着色）、左が着色不良。モノクロでも着色度合の違いがわかると思う。収穫期の高温により、左の着色不良果を樹に残したとしても、完着する頃には皮が浮いて味が落ちている。2021年12月

が刻み込まれている。

気候変動のこと

さて。みかん農家の話である。いま7反（約70アール）のみかん畑を耕作している。8月末にカボス、10月下旬から早生温州とスダイダイ、11月半ばから暮れにかけて中生・晩生温州、年明けに不知火、3月頃に甘夏を取込む。今季、8年連続の不作見込である。これは早くから約束されていたようなものだ。

極端な気候がいまやニューノーマルになってしまった。猛暑、旱魃、豪雨、暖冬、寒波が波状攻撃を仕掛けてくる。猛暑と旱魃で樹勢が弱ったところに秋から年内にかけての高温で果実の品質劣化が顕著となる。暖冬により貯蔵養分を浪費し樹勢が弱ったところに年明け強烈な寒波が来てさらに樹勢が弱り、葉が落ち、春の新芽、花芽に影響する。不作と品質劣化のスパイラルが断ち切れない。

安下庄（あげのしょう）アメダスより、9月半旬ごとの平均気温、最高気温平均、最低気温平均を別表に書き出してみた。猛烈な残暑と言われた昨年9月を上回る高温で推移しているのがわかる。平年値1（2020年平年値）、平年値2（2000年平年値）と比較すれば、近年の気温上昇が如何に急激且つ深刻であるかが理解できる。

年内いつまでも気温が高く、下がるべき時季に下がらない。高温で果実の成育が早まり果皮の老化が進み、十分に着色しないまま浮皮が発生する。なりこみ不足による大玉、甲高も多発、良玉の数量が出ない。気候変動についていけなくなった青島温州などの在来品種を作り続けたところでいいとこなし。収量の多い老木を伐り苗木更新すれば、収量が戻るまで10年どころでは済まない。苗木更新は不可欠とはいえ年数がかかる。放任・荒廃園地の増大により樹を枯らすゴマダラカミキリが増える。苗木が順調に成育する保証はない。

安下庄アメダス観測値

9月の平均気温　（単位 ℃）

		2022年	2021年	平年値1	平年値2
第1半旬	1～5日	26.0	25.2	25.6	25.1
第2半旬	6～10日	26.2	24.8	25.1	24.3
第3半旬	11～15日	27.5	23.2	24.4	23.6
第4半旬	16～20日	25.4	23.8	23.6	22.9
第5半旬	21～25日	22.4	23.6	22.8	22.1
第6半旬	26～30日	22.5	23.8	22.0	21.1

9月の最高気温平均　（単位 ℃）

		2022年	2021年	平年値1	平年値2
第1半旬	1～5日	29.6	28.3	29.8	28.7
第2半旬	6～10日	30.2	28.9	29.2	27.8
第3半旬	11～15日	32.0	26.0	28.5	27.0
第4半旬	16～20日	28.8	27.4	27.6	26.2
第5半旬	21～25日	26.0	27.9	26.6	25.3
第6半旬	26～30日	25.9	27.5	25.8	24.4

9月の最低気温平均　（単位 ℃）

		2022年	2021年	平年値1	平年値2
第1半旬	1～5日	22.5	23.0	22.4	22.0
第2半旬	6～10日	23.2	22.0	21.9	21.3
第3半旬	11～15日	23.8	21.2	21.2	20.7
第4半旬	16～20日	22.7	20.9	20.4	20.1
第5半旬	21～25日	19.4	19.9	19.6	19.3
第6半旬	26～30日	19.6	20.4	18.8	18.2

平年値1＝2020年平年値（統計期間1991-2020）
平年値2＝2000年平年値（統計期間1979-2000）

就農2年目の2014年以降、気候変動を考慮しつつ園地の若返りを図り改植を進めてきたが、それを根底から見直さねばならぬ事態に直面した。今ある温州みかんの若木を育てて当面の収量を確保しつつ、温州と温州の間にカ

早生温州みかん。2021.11

カボスの炭酸割は炎天下のバテ薬。2022.9

山の畑で寿太郎温州の収穫作業。2021.12

ボスやスダイダイなどの香酸柑橘の新苗を植え付け、それが成育したら温州を伐採する。温州みかんは比較的気候変動に対応できるとされる品種（寿太郎、石地など）に絞る。収穫期の高温により収穫適期が極端に短くなった。作付が多すぎると収穫遅れによる品質劣化を生ずる。特に寿太郎は味が濃厚で良玉率が高く、これから先も望みが繋げる数少ない温州品種なのだが、こればかり植付けるわけにもいかない。収穫期の分散も考慮し、温州の作付を減らすしかない。数年かけて改植を進める。方向転換するなら早い方がよい。役場職員であるかみさんの給与収入があるうちに、農業で食い続けていける土台を築き直さねばならぬ。改植して10 年程度の温州みかんをいま伐れば、何と馬鹿なことをと陰口叩かれるだろう。広島県でみかんを見限りレモンに切替えた当初も、改植に取組んだ人たちが愚か者呼ばわりされたと聞く。それでも柑橘を作り続けるために、子供に引き継ぐために、いま私の代で肚を括らねばならぬ。

ここまで記したように、今の大島は、既に在来種の温州みかんの栽培適地ではなくなっている。みかんの栽培適地は九州から瀬戸内、和歌山にかけての西南日本および東海地方から神奈川県とされてきたが、このまま気候変動が進めば埼玉県や北陸地方が適地になるという説がまことしやかに流布されている。埼玉県をディスるつもりはないが、気温だけなら適地かもしれぬが、潮風の当らない内陸部でウマいみかんの出来よう筈がない。夏の気温の高い北陸地方にしても気温上昇により日本海の水蒸気発生量が増えて冬の降雪が増えるがためにみかん栽培は不可能だ。気候変動により栽培適地が北上するという説はウソだ。正しくは、栽培適地が無くなるということである。気候変動にまつわるエラい先生方の御意見を見聞きする度に、こいつら真性の馬鹿かと思ってしまう。……と、悪し様に書いてしまったが、致し方ないことなのかもしれない。農業をしない者に、農業がわかろう筈がない。

「田植えと稲刈りだけが米作りではない。農業をなめるな」と言った人がいる。「平さんの天空の棚田」（小社刊、那須圭子著、2012 年）の紹介記事が中国新聞に載り、それをみて注文してくれた広島県の農家さんのコメントである。島の棚田で水の管理なり病害虫防除なり色々な苦労や工夫がある筈だ。それが、田植えと収穫しか撮られていないといって、農業をなめるなというコメントにつながる。原発計画に揺れる山口県の祝島で祖父の代からの棚田を守るオジイに絞った話で、農業を撮った本というわけではないのだが、こうした指摘を戴いた。この本を出したのが 2012 年 8 月。翌 2013 年から私は農家兼業になった。農業をなめるなという言葉の真意が、今となってはよくわかる。

島の行く末を見届ける

拙著の巻末で索引を取った。「赤い資本主義」「空家」「アグリ・インダストリアル（農・産業）」「アサリの資源枯渇」「悪しき官僚主義」「軋轢の生ずるうちは限界集落ではない」など、項目は多岐にわたる。気候変動に関係する項目も多い。拙著に収録したのは 2020 年 5 月までの日録である。内容を補うため、記録的猛暑といわれた 2020 年 8 月の記述を、原稿用紙 70 枚に及ぶ前書の中で長く引用した

が、猛暑のインフレとでも言おうか、2020年より21年、2021年より22年と、気候変動の害は年々酷くなる。いまの目で読み返すと、拙著に記された気候変動に対する私自身の認識が、牧歌的といえるほどに甘いものと映る。たかだか2年前に刊行したものが、である。自分の書いたものが敵に見える。ジャーナリストの仕事の特質は、認識を上書きしていくことにこそある。

自身の認識を上書きしていくその過程、錯誤も含め、苦悩する過程を記録する。それも、外来の取材者としてでなく、島社会の生活者として、ひとところに腰を据えて。人生の残りの時間をかけて、宮本常一ができなかったことをやってみようという欲がわいてきた。

拙著前書の末尾で、以下の通り記した。

「農業を中心とした島暮しの日録は、本来ならば文字数の上限を気にせず、日々の出来事を新たに書き連ねていくウェブ連載やブログ向けなのかもしれない。だが、読み手がいちいちつっかえ立ち止まり、記述の時間軸を往ったり来たりして考え込み、悩み、立ち往生するための触媒としての〈紙の本〉の形をとることに、私は執着した。そして私は、自身の中で時間を止めないために、今年（2020年）6月以降も変ることなく日々の記録を続けている。これから書き継いでいく日録の続編を活字化するつもりはない。プリントして綴じて保存しておけば、将来息子が道に迷った時、何らかのヒントになるかもしれないし、ならないかもしれない。」

拙著を出したあと考えが変った。上記を撤回する。向う2年のうちに続編を出す。出版をめぐる情況が悪化し続ける中にあってどこまでやれるかわからないが、それでも3冊目、4冊目、5冊目も出す。耕作放棄地の拡大と気候変動による営農のさらなる困難、疫病による社会変化、地方の衰退、島社会の崩壊、みかん産地の崩壊、過疎化高齢化の行く末、見届けられるところまで見届ける。辺陬の島は、島嶼国家日本の実相を映し出す。

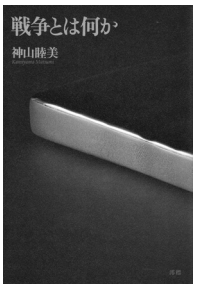
ここ大島にあって、事実上、宮本常一以降の歴史は書き遺されていない。活字で記録することに対し価値を認めることのできない、反知性主義が横行するこの時世にあって、宮本以降の「周防大島島史」が編まれることはないだろう。ささやかなれど、私の書き遺すものが大島の同時代史となる。あったことを「なかったこと」にはさせない。世人の唾棄する些末にこそ真実が宿る。

（やなぎはら　いっとく・みずのわ出版／みずのわ写真館／みずのわ農園代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『戦争とは何か』●神山睦美著



本書の刊行の直接のきっかけは、この2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻という事態であるには違いない。確かに本書第一部は「ウクライナ戦争をどうとらえるか」と題されており、著者によってSNSに投稿された「ウクライナ戦争への反対声明」が掲載されているし、また今回の侵攻についての歴史的背景への言及もある。しかし、本書で主題化されているのは、状況論であるより、戦争の本質とは何かという戦争の哲学的理解であり、古今東西の哲学者、思想家、作家たちの思考を参照しながら、戦争を原理的に把握し、それを超えていく普遍的道筋を示すことなのである。そこで最初に明確に打ち出されているのが「絶対非戦論」の立場である。それは「どのような戦争にも反対するという考え、たとえ侵略されるようなことがあっても、国家の軍事力をもって戦うことは拒絶するという考え、さらには、戦わないということによって、奴隷の立場に追いやられたとしても、甘んじて受け入れ、みずから行うべきことを黙々とおこなうという考え」ということになる。

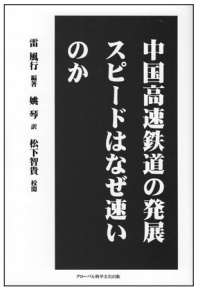
著者はこのような考えを直接には、小林秀雄や柄谷行人、吉本隆明といった日本の批評家、思想家から引き継いでいる。古くは聖書にある「右の頬を打たれたら、左の頬を出しなさい。」あるいは親鸞の「善人なおもて往生をとぐ。いわんや悪人をや。」に通じるものである。これを、まったく現実離れした評論家による能天気な理想論として退けるのは簡単である。実際、今回の戦争について、このような絶対非戦論と交差する見解は世界中見回しても皆無であると著者は言う。しかし「それならば、あえて、私たちが小林秀雄、吉本隆明、柄谷行人の絶対非戦論を私たちなりのかたちで唱えていくことは、意味がある」そう著者は書くのである。

第二部「なぜいま絶対非戦論が問題とされねばならないか」では、吉本隆明の『甦えるヴェイユ』や、『全体主義の起源』等のハンナ・アレントの思考が、絶対非戦論の立場から考察される。第三部「戦争とは何か」で主に取り上げられるのは、日本の哲学者、竹田青嗣の思考である。竹田の「普遍戦争」という、世界秩序の基礎にセットされている自己中心性あるいは非融和性が、彼の「人間のメンバーシップ」や「生成する欲望」といった理念によってのり超えられる可能性が述べられる。

第四部「ドストエフスキーと『戦争』」で非常に興味深いのは、ツァーリズムやスターリニズムの温床となったと言われる「ケノーシス」というロシア人のエートスについて触れているところである。ここでの考察は現在のロシアの状況を語る上でも欠かすことができないものと思われる。そして第五部「漱石と戦争」では、伊豆修善寺での大量喀血と三十分間の死の体験が、漱石の意識をどう変え、作品に戦争がどう映し出されていくかを見ていく。（N）

◆1800円・四六判・310頁・**澪標**・大阪・202208刊・ISBN9784860785475

『中国高速鉄道の発展スピードはなぜ速いのか』●松下智貴 校閲 / 姚琴 訳 / 雷風行 編著



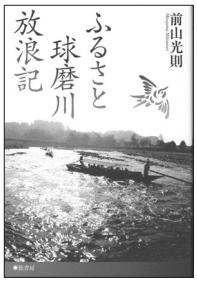
中国の鉄道は近年長足の進歩を遂げています。すでに1997年から六度にわたり在来線の大幅な高速化に乗り出していましたが、その後いよいよ新規の高速鉄道建設を開始します。本書はそれから急速な発展を遂げた中国の新幹線網について詳しく解説しています。車両の制作にあたってはフランス・ドイツ・カナダ・日本の企業と提携をしましたが、重要視していたのは高速鉄道先進国から学んだことをいかに自家薬籠中のものに出来るかということでした。ここにはただ高速鉄道を敷設するのではなく、高速鉄道を国内に張り巡らすと同時に世界にも中国製の高速鉄道ブランドを確立したいという国の狙いがよく表れています。そして2005年の着工からわずか三年、ちょうど北京オリンピックの直前に、初の新幹線である北京～天津間120キロが開通しました。ここからも中国が自らの手により高速鉄道を作り上げることを、国家の威信をかけたプロジェクトとして位置づけていたことがよくわかります。

それに伴い、今や世界トップクラスの橋梁技術に代表される土木技術、安全な運行の管理、旅客サービスも大幅に発展していきます。そしてその後も北京・上海・広州など国土の縦横へ高速鉄道が張り巡らされていきました。国家プロジェクトとして怒涛の勢いで建設の進められる中国の高速鉄道網の長さはすでに世界一の規模に到達しました。どのようにしてそれが達成されたかを知るには、本書はうってつけです。

（副隊長）

◆2980円・四六判・240頁・**グローバル科学文化出版**・202208刊・ISBN9784865160734

『ふるさと球磨川放浪記』●前山光則著



『ふるさと球磨川放浪記』前山光則著　球磨川は熊本県南部の人吉盆地を貫流し、川辺川の支川などを合流し八代市に入り不知火海に注ぐ。著者は球磨川流域に育ち、その流域を隈なく歩き回り、本書は生き生きとした体感でもつて表現されている。いくつか挙げてみる。人吉を治めた相良氏は、遠州相良荘の出である。人吉には江戸期に百太郎溝と幸野溝が開削された。幸野溝の開削者藩士高橋政重は、何度も洪水に遭遇するが諦めず、喜捨を仰いで自力でやり遂げた。その恩恵は今日も続いている。球磨川の舟運を開いたのは商人林正盛である。川には巨岩がひしめいている。大瀬の巨岩は、正盛が狐に「岩の上で火を燃やせ」と術を教えられ、その通りにしたところ岩が割れこれで参勤交代・物資の輸送の便が図られた。阿部知二は山奥の五家荘九連子の日支事変で戦死した4兵士像を訪れている。そこから流域に民話が生み出された。小山勝清は相良村の出身で、『彦一頓智ばなし』を世に出した人で有名である。民謡では五木の子守唄がある。「おどまかんじん　かんじん　あん衆たちや　よか衆」という歌詞ついて、他の民謡が持つおおらかさは消え、子守の女たちにつきまとった貧しい境遇によるとされる。21番目は「花はなんの花　つんつん椿　水は天下のもらい水」とあり、何時までも心に残る。風物詩として、春風ときじ車、魚捕りと夏祭り、おくんち祭り、霧と温泉、猪狩り、球磨川下り、球磨焼酎など、話題は尽きない。＜本丸に立てば二の丸花の中＞（人吉城址にて。上村占魚）

（古賀邦雄　古賀河川図書館）

◆2100円・四六判・326頁・**弦書房**・福岡・202209刊・ISBN9784863292574

『薬害裁判 ー副作用隠蔽事件を闘った町医者の記録』●井手節雄著

サリドマイド、スモン、薬害エイズと薬害被害は後を絶たないが、これらは氷山の一角で、水面下にくすぶり、あるいは密かに葬り去られたものは数知れないのではなかろうか。医師になって50年、鹿児島県の町で平凡な小児科医を営む著者は脳貧血発作を発症し、めまい、倦怠感などの体調不良に悩まされるようになる。原因が排尿障害で一年前から服用している治療薬の副作用であることを自らの手で突き止め、製薬会社と販売元に症状と副作用の危険性を詳しく報告した。

ところが、半年も経てから届いた返答は、薬との関係を一蹴する誠意のないものであった。専門医に善処を求めても反応はなく、蟷螂之斧をもって裁判に訴える。医師としての良心からだ。しかし、製薬会社は副作用の事実と向き合わず、裁判官を誤誘導する法廷戦術で引き延ばしと隠蔽を図るばかり。

ほかにも、近年高止まり状態の自殺者数と抗うつ薬服用との因果関係や、自身が経験した高コレステロール血症治療薬による糖尿病の悪化などを厳しく指摘する。多くの苦しむ人がいるのに医学界は動かない。その病根は、「金とみれば取り組み、公表すべき事実とみれば隠し、法とみれば破った」モンスター化した製薬ビジネスと製薬マネーに取り込まれた医療世界の倫理観の欠如にあるという。薬は患者のために作るものという当たり前を実現させるために、私たち患者側にも考えるべきことがあるのではないだろうか。（飯澤文夫）

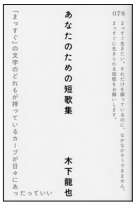
◆1300円・A5判・214頁・**南方新社**・鹿児島・202208刊・ISBN9784861244711

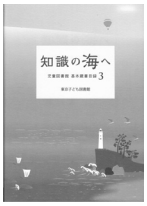
売行良好書

期間：2022年9月15日～10月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(2)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(3)『オールアラウンドユー』1800円・ナナロク社　(4)『うたうおばけ』1400円・書肆侃侃房　(5)『知識の海へ』3600円・東京子ども図書館　(6)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』800円・リーブル出版　(7)『暴れ川と生きる』1900円・忘羊社　(8)『となりの谷川俊太郎』1454円・ポエムピース　(9)『沖縄の身近な植物図鑑』4500円・ボーダーインク　(10)『小学生が描いた昭和の日本』2500円・石風社　(11)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1800円・アスク・ヒューマン・ケア　(12)『自然農・栽培の手引き』2000円・南方新社





［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(2)『松浦武四郎入門　改訂版』1200円・月兎舎　(3)『千夜曳獏』1800円・青磁社　(4)『毛鉤釣手帖１』2273円・黒石商店　(5)『うたうおばけ』1400円・書肆侃侃房　(6)『三蟠鉄道記録集』3000円・吉備人出版　(7)『金山衆と中世の鉱山技術』7000円・高志書院　(8)『井の頭公園いきもの図鑑　改訂版』1600円・ぶんしん出版　(9)『新版　奥多摩登山詳細図　西編』900円・吉備人出版　(10)『新しい時代をひらき滅びた鎌倉幕府』1800円・冬花社　(11)『信州発掘奮戦録』2000円・ボロンテ　(12)『サルタ彦大神と竜』2000円・大元出版　(13)『なごや　街と交通の一世紀』8000円・樹林舎　(14)『希望の一滴』1500円・西日本新聞社　(15)『鎌倉武士と横浜』1000円・有隣堂　(16)『都市経営からまちづくりを考える』1818円・大阪公立大学共同出版会　(17)『奈良の銘酒』1200円・京阪奈情報教育出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼大リーグのア・リーグＭＶＰに輝いた2021年に続き、2022年も「リアル二刀流」で注目を集め大活躍をしたエンゼルスの大谷翔平選手の地元の新聞社である岩手日報社から、今年も保存版写真集【特別報道写真集　大谷翔平2022　伝説を超えた二刀流】が刊行されます。ISBN978-87201-843-1 本体価格1300円。11月初旬刊。2018年刊の【大谷翔平挑戦】（ISBN 978-4-87201-829-5 本体価格1300円）、2021年刊の【特別報道写真集　大谷翔平２０２１　リアル二刀流の軌跡】（ISBN 978-4-87201-839-4 本体価格1300円）に続く報道写真集となります。

▼本誌でも昨年度々取り上げてきました人気パズル「数独」の名付け親、鍛治真起さんが2021年８月亡くなって１年が過ぎたところで、その評伝が刊行されました。【すばらしい失敗　「数独の父」鍛治真起の仕事と遊び】というタイトルにある「すばらしい失敗」とは、2007年に鍛治さんがアメリカのニューヨーク・タイムズ経済面トップで取り上げられた際に使用された言葉「Brilliant Mistake」のことで、世界的に人気になった「数独」を海外で商標登録せずに儲けそこなった、というエピソードに由来することが本書の冒頭で紹介されています。「鍛治さんはこのフレーズをいたく気に入り、知人に会うたびにうれしそうに話した。富や名声などに興味のない鍛治さんにとっては、最大級の誉め言葉だった」とも。ISBN 978-4-89072-379-9 本体価格1800円。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントはネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットでご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。